

「ようやく全戸に念願の水道が通せます。仮設住宅も順調で、お盆までには全て入居できそうです」

東日本大震災で被害を受けた宮城県南三陸町の佐藤仁町長から、うれしい便りが届いた。少しずつではあるが、復興への歩みが進んでいる様子がうかがえる。

さらに手紙では、国の動きは鈍くて懸念しているが、ある国会議員に相談したところ「自治体に寄り添って解決してくれた」と書かれていた。「ほかの議員は大いに見習ってほしい」と添えてあった。

その議員は、阪神・淡路大震災でのボランティア経

はとう添り寄り

験もある。聞いてみると、町からもらった宿題を一刻も早く解決しようと、東北から帰る車の中で各省庁に問い合わせ、町に返答したそう。すると、町長から「相談して返事をもらったのは初めてだ」と感激されたという。

震災後、同町を訪れた国会議員は100人を超え

る。町長ら幹部は復旧・復興に追われる中、貴重な時間を割いて対応した。被害の全容や窮状を訴えることで、少しでも復興に力を貸してもらいたい。そんな一心からだった。しかし、思いが受け止められなかったのか、ほかの議員からは音

沙汰がなかったという。

病院が流された同町では、イスラエルの医療団から受け継いだ仮設診療所が命綱だ。多くのお年寄りが訪れる診療所に冷房やトイレを整備するのが喫緊の課題だったが、議員が省庁や宮城県と掛け合い、資金が出ることになった。

「小さなことでも、その人、町にとつては大切だ。一人一人の被災者に寄り添う姿勢が必要」と議員は話す。そういえば、辞任した松本龍前復興対策担当相も「被災者に寄り添って」と語っていた。寄り添うとはどういうことか。いま一度考えてほしい。